

(患者を生きる:4051)新型コロナ 在宅でのケア:4 情報編 普段通りの生活をめざす

会員記事

2020年11月13日 5時00分

新型コロナウイルス流行中の在宅の介護者の不安

ショートステイ(短期入所)やデイサービス(通所)を利用できず、介護される人の体力が落ちた。介護する家族の負担やストレスは増えた

マスクや消毒液、減菌ガーゼなどの衛生資材が手に入らない

突然の休校で子どもの生活リズムが乱れ、体調を崩しがちになった

マスクができない障害児を連れて買い物に行けず、困っている



日本ケアラー連盟が3月に実施した介護者へのアンケートから抜粋

新型コロナウイルス流行中の在宅の介護者の不安

自宅や介護施設で過ごしながらか訪問診療を受ける人は増えている。厚生労働省によると、2010年には約30万人だったが、19年は約80万人になった。連載に登場した金野太晴(このたいせい)くん(11)のように医療的ケアが必要な子どももいるが、9割以上は高齢者だ。

在宅の場合、日常生活で接する人は家族やデイサービス(通所)、訪問看護のスタッフなどに限られるが、高齢だったり基礎疾患を抱えていたりする人が多く、感染後の重症化リスクは高まる。

そんななかで今春の新型コロナウイルスの感染拡大は、現場に大きな不安をもたらした。マスクや消毒液などの備品不足のほか、発熱した場合にPCR検査を受けるハードルも高かった。在宅患者の発熱の原因には尿路感染症や誤嚥(ごえん)性肺炎などがあるが、新型コロナの可能性を捨てきれない。梶原診療所(東京都北区)の医師で日本在宅医療連合学会の平原佐斗司(ひらはらさとし)・副代表理事(57)は「発熱患者が出ると戦々恐々としていた」と振り返る。

当時、外部との接触を避けて感染リスクを減らそうと、患者の家族が訪問看護や通所の利用を控える動きもあった。ある事業者はコロナ下で「(普段の)半数がキャンセルになった」と打ち明ける。だが、平原さんは「感染を恐れて通所を控えると、患者や介護を受けている人の全身状態が逆に悪くなる」と心配し、「なるべく普段通りの生活を送ることを心がけて」と話す。

仕事や学校などで外を出歩く同居家族からの感染は、可能性の高い経路だ。極端に接触を避けることはないが、在宅の患者と話すときにはマスクをしたり窓を開けたりするなど、リスクを減らすことが必要になる。

万が一、在宅の患者に感染の疑いがある場合、在宅で検査を受けられる事業者は多くはない。また、患者の家族が感染した場合、濃厚接触者となる患者を一時的に受け入れる施設もほとんどない。同居家族が1人の場合、家族の感染時に患者がどこでどう過ごすのかも悩ましい問題だ。新型コロナ流行下での在宅医療を十分に支えられる環境の整備は途上だが、これから寒さが本格化していく。(後藤一也)

■ご意見・体験は、氏名と連絡先を明記のうえ、iryok@asahi.com へお寄せください。